

アトリエ 琉游舎 だより 35号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2018年9月12日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

映画の秋
読書の秋
瞑想の秋

秋色

収穫の秋
食欲の秋
会話の秋

- まだまだ残暑の厳しい9月ですが、夏休みも終わり実りの秋に向かって、人それぞれ思い思いの秋がやって来ます。
- 9月から琉游舎も秋仕様。いつの間にか風の音が変わり、自然の香りが変わり、風景の色が変わり、そして私達の心持ちも変わり、秋に埋め尽くされる季節がやって来ます。
- 皆さんのそれぞれの秋に合わせて、琉游舎で思い思いの秋をお楽しみ下さい。定期開催している「読書会」「写経会」「詩話会」「映画会」は、いつでもどこからでも、気軽に参加出来ます。必要なものは全部琉游舎でご用意いたします。手ぶらでお越し下さい。
- 琉游舎はふらっと立ち寄ってお茶やお酒を飲みながら無駄話をする場所でもあります。世の中無駄なことは何一つありません。だから「無駄話」も無駄ではないはずです。
- 「映画会」は9月27日の会からフランス映画の名作と名作文学を原作にした映画を上演します。日本語吹き替えではなく、字幕スーパーとなります。ご了承下さい。

読書会

9月25日(火)
10月9日(火)
13時半から

写経会

10月2日(火)
10月7日(日)
13時半から

彼岸会法要

9月22日(土)10時から

映画会

毎週木曜日
13時半から

9/20	13時半	めぐりあう時間たち (115分)	ニコール・キッドマン、ジュリアンムーア、メリル・ストリープ。三つの時代、三人の女がそれぞれに迎える普通の朝。何気ない一日を交錯する喜びと悲しみを描く感動作。
9/27	13時半	禁じられた遊び (87分・字幕)	第2次大戦下の南フランス。長にポーレットは両親と愛犬を失う。以来彼女は墓の十字架を盗むようになる、、、ナルシソ・イエベスの主題歌も有名な傑作映画・
10/4	13時半	罪と罰 (84分・字幕)	ロシアの文学者ドストエフスキーの最高傑作の映画化。人殺しの罪の意識に追い詰められていく主人公の心の移り変わりを、名優ピーター・ローレが熱演。
10/11	13時半	どん底 (92分・字幕)	ジャン・ルノワール監督。泥棒のバベルがある屋敷に忍び込むと、主の男爵は自殺を図ろうとしていた。男爵とバベルは意気投合するが、、、巨匠ルノワールの描く絶望と希望の映画。
10/18	13時半	嵐が丘 (104分・字幕)	エミリー・ブロンテ原作。兄妹のように育ったキャシーとヒースクリフ。2人は成長してもひかれ合うが、上流階級の生活にあこがれるキャシーは、、、ラブロマンス不朽の名作。
10/25		10月25日(木)の映画会はお休みします。	
11/1	13時半	嘆きのテレーズ (103分・字幕)	マルセル・カルネ監督、シモーヌ・シニユレ主演。テレーズは恋に落ちた運転手と夫の殺害を実行する。夫の死は事故死と扱われ完全犯罪は成立するとみられたが、、、

あれほど暑かった夏も終わりを告げ、このところのコリーナは秋雨前線が停滞し洗濯物の乾きが悪いと嘆くような日が続いています。人間勝手なもので、暑ければ暑いでこれでは畑仕事が出来ないといい、雨が降り続けばこれはこれで畑仕事が出来ないといい、万事全てに渡って何かといいわけと不平を述べるものです。私もご多分に漏れず、結局何もしないで無為に過ごす一日を「季節の変わり目は体が重い」と日記に書き綴りながら、それでもタイムリミットになる寸前には、なんとか天気と自分への言い訳の折り合いをうまくつけて「よっこらしよ、さてやるか」と、重い腰の上げ下ろしを繰り返しながら、実りの秋に乗り遅れないよう、辻褄合わせだけはしっかりやってきたようです。誇れたものではありませんが冬においしい漬物と鍋を食べたいというこだわりがなせる業なのでしょう。

こだわりがないように周りに見せて、結構こだわっていることが人には一つや二つあるものです。”何でもいいよ、みっともなくなければ”と服装にこだわらないところを装いながら、会社に着ていくスーツの色やネクタイにも、今日予定されている出来事や会う人に合わせて自分で選んだりするものです。私にはほど遠いことですが、無理なく等身大にノンシャランと着こなすセンスがあれば、もう少し私の衣装箱は違ったデザインの服が収納されていたことでしょう。会社員生活をやめてから私は文字通り服装に無頓着になってしまいました。僧侶の日常着は作務衣、仕事着は道服と袈裟です。それ以外は夏はこれ以上暑くならない服装、冬はこれ以上寒くならない服装をしていけばすんでしまいます。服装にこだわらないといえば聞こえがいいのですが、気遣いがなくなると安易に流れ、いい加減で節度がなくなってしまうでしょうから、少しは服装にも頓着した方が良くかなとも思っています。

法華経五百弟子授記品第八に、弟子の富樓那がお釈迦様について述べる「拔出衆生 処処貪著」という一節があります。前の言葉を補うと「（お釈迦様は衆生のために教えを説き）様々な貪りと執着から解き放ってください。」という意味になります。「頓着」と「貪著」は同語源で意味は全く同じ。かつては「貪著」が使われ「とんじゃく」と読みます。法華経に「貪著」という言葉は何度も出てきますが、それは良い意味ではなく、衆生の迷い・苦しみの根源^{注1}の一つが「貪著」であるとお釈迦様に断言されている言葉なのです。貪りこだわり執着する心は迷いや苦しみを引き起こします。「利養に貪著」したり「名利に貪著」^{注2}したりするのが人間であり、そこからお釈迦様の教えによってこだわりがなく自由にあるがままに観ることができる境地に救い出され、そこがやすらぎのところとなるのです。そしてそこは「貪著」の真反対の境地「無貪著」の境地です。つまり今の言葉でいえば「無頓着」です。

ところで、無頓着の境地が覚りのところといわれても、今の私には全面的に受け入れるにはまだ頓着がありすぎるようです。お釈迦様の言われていることを素直に受け取れば、無頓着こそが私たちの求めるべき境地なのでしょうが、日常社会の関係性の中では、無頓着を実践し続けないと、その言葉は「無気力」「無関心」「無責任」になってしまうでしょう。あるいは「無感動」と「無作法」を付け加えてもよいかもしれませんが。何度もこの場で書いてきましたが仏教の教えは一見シンプルで分かり易いのですがそれは危険な教えでもあるのです。言葉の表面をなぞるだけでは「こだわりのない」は「関係ない」や「誠意がない」にいつでも変わってしまうでしょう。教えの言葉の表面を都合よく受容し、それを自分たちの利養や名利のために使ったとしたらそれはもうお釈迦様の教えでも何でもありません。

「頓着」に否定の「無」をつけると「無頓着」になります。これを正反対の意味・対立概念だと見てしまうと、お釈迦様の教えを誤って受け入れることになります。あるがままに観ることからほど遠いこの二元論的見方は「正・邪」「善・悪」と同じように価値観で判断することであり、コインの裏表のように、価値を決める人にとってはいつでも入れ替え自由なのです。お釈迦様の言う「無」は否定の「無」ではありません。あえて言葉でいえば「空っぽ」です。ごまかすわけでは決してありませんが、いわゆる理（ロゴス）ではこれ以上は説明できないのです。それは全く位相の異なる「信」によって立つものだからです。お釈迦様の言われる「無頓着」は「頓着」も「無頓着」もない「空（からっぽ）頓着」です。日々の生活の中でこだわりを極めて何かを作り上げること、そのこだわりを離れて新たな創造を行うこと、そしてその実践を日々飽くことなく続けることが、私にとっては頓着に空っぽでいる状態だと思っています。「こだわる こだわらないに こだわらない」あるいは「こだわる こだわらないに こだわる」という双方向出入り自由な毎日を実践することがお釈迦様の言われる「無頓着（空頓着）」であると信じています。

私は毎日を豊かに楽しく過ごすことにこだわりたいと思います。ただ、そのことに執着したくはありません。暑ければ着ているものを一枚脱ぐ、寒ければ一枚重ねる。そのようにこだわりを日々脱いだり着たり毎日が、楽しい毎日の秘訣ではないかと思えます。暑ければキュンと 琉游舎：戸井 出琉・恭子 体を冷やすビールが、寒ければ心底温まる熱燗が、もう お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152 一つの楽しさの秘訣であることは言うまでもありません。 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850

注1：三毒（貪欲・瞋恚・愚癡）
注2：ワイド版岩波文庫 法華経序品P50,62